

大久野通信 vol.11

夏到来！



今年も夏本番となりました。夏と聞いて思い浮かぶのは・・・灼熱の畑です。昨年は雨不足で水やりで苦労しましたが、今年は日中猛暑で夕方に土砂降りといった、東南アジアのスコールを彷彿させる天候が続いています。そのお陰で、水不足による障害は発生していません。野菜たちには、まさに恵みの雨ですね。

一方、多少の雨でも、予定した作業を進めなければならないのが週末農家の悲しい嗟嘆。例えずぶ濡れになろうとも、作業は雨天決行で臨む大久野倶楽部です。

INDEX

- ・今期の初実証
- ・成果はいかに？
- ・その他の夏野菜たち
- ・今後の展望

今期の初実証

今期の実証用畑作りは、まだ朝晩暖房が恋しい時期でした。RBSゴールドと化成肥料で差が見られるのか、RBSゴールドに不足する加里成分を加えたらどうか、といったことをテーマに掲げて、ジャガイモを植え付けました。昨年農業実証に取り組んだ際、初めて挑んだのがジャガイモでした。あれから、早いものでもう1年、時間は瞬く間に過ぎました。



仕上がった畑

成果はいかに？

昨年は、小ぶりなジャガイモばかりでした。間引きを怠ったのが主な原因と考え、今年はしっかり間引きを実施しました。作付け後3週間程度で芽吹き始め、施肥した試験区は肥料の種類に関係なく葉が繁茂し、施肥無しは明らかに葉の育成に勢いが有りません。化成肥料とRBSゴールドで、大きな差が無い生育状態でしたので、収穫量も期待できると確信しておりました。



繁茂したジャガイモの葉

ところが収穫してみると・・・



化成肥料



RBS-G + 加里



RBS-Gのみ

収穫した状況は写真の通りです。化成肥料の試験区が明らかに大漁で、RBSゴールド試験区は重量ベースで約35%少ない収穫量でした。加里の有無で差は見られませんでした。

原因は、RBSゴールドの特徴である緩効性が考えられます。RBSゴールドは、窒素成分を豊富に含む肥料なのですが、その形態は有機態です。植物が利用できるのは無機態であり、有機態は地中の微生物で分解されて無機態となります。分解を経てから窒素が消費されるのが緩効性の原理なのですが、気温が低いと微生物の活動が鈍ってしまい、作物に十分な窒素を供給できません。つまり、気温が低下する時期の作物育成には、施肥量を規定より多くして窒素不足を補う必要があった訳です。同様のことは、真冬にプランターで実施した小松菜栽培でも発生しました。規定の5倍施肥した試験区のみ青々とした葉が育ち、それ以外は窒素不足を示す葉の黄色化が起こっていました。

「季節による最適な施肥量がある」、今回の実証でそれが明確になりました。

その他の夏野菜たち

現在、実証用の畑では夏野菜が元気に育っています。昨年の様々な失敗を踏まえて、少しずつではありますが、まともな作物が作れるようになりました。以下はその一例です。これ以外にも、ゴーヤ、空心菜、インゲン豆、スイカ、メロンも育っています。実証では、RBSゴールドによる土質の変化も調査しています。果たして、RBSゴールドを継続的に用いることで、栽培に適した土質に変化するのでしょうか。



丸ナス



ピーマン



とうもろこし

今後の展望

様々な作物育成を通して、RBSゴールドの肥料としての特徴が少しずつ判ってきました。一方で、大久野倶楽部では田んぼでの活動も行っています。水稲栽培では、酸素が届き難い土壌部で、嫌気性菌によりメタンが発生します。地球温暖化ガスと言えばCO2ですが、メタンはCO2の25倍も温室効果があり問題視されています。RBSゴールドに含まれる腐植成分は、その働きを抑える効果が期待できる（ラボ実験では確認済み）ので、肥料効果に加えメタン抑制資材としての可能性も探っています。今後の動向は、大久野通信でもご紹介する予定です。